

WEB連載 *Entertainment・Essay*

木村奈保子の
音のまにまに

Written By NAHOKO KIMURA

“わきまえる女”の時代は過ぎ去った

木村奈保子の音のまにまに | 第30号

つい先ごろ、「女は話が長い」というコメントで、元オリパラ組織委員会会長の女性差別が問題となった。

ジェンダー研究者の私としては、怒りを感じるというより、「あ、まだ、日本ではそんなところですか?」という、男女差別感で悪い唇に展れたくらい小さい驚きだった。

それでも、今の若い女性たちが、本気で怒りを感じはじめたのだから、このような問題意識が広がったことは、かなり喜ばしいことだと思う。

ただ、現実的には「女は話が長い」と言われる状況を私は見たことがなく、だから、元会長の言葉に対して、怒りよりも「何を言ってるのかな?」としか思えなかった。ピンとこないのだ。

よくよく考えると、そういう言い回しで、女性の口封じをしていたということなのか?女は口をついたん口を閉くと、頭の回転が悪いから、ついつい長くになるので、男が話すほうがいい、という意味合いまで含まれていたのか。



「マイ・フェア・レディ」(1964年・米)のヒギンズ博士が、女は、どうして男のようにできないのか、長い髪がもつれるように頭ももつれている……といった表現で歌っていたが、そういう古い世代の女性観をいまだに、想定していたのだろうか。

この映画は、教育を受けられ、どんな女性も変われるという前向きなテーマもあったが、いま日本のテレビ業界では、学歴の高い女性コメンテーターが増えた。

エンタテイメント番組より、トーク番組が多いせいだ。

しかしテレビに出演する超エリートとされる高学歴出身の女性観者たち、そのしゃべり方が、しゃしゃしゃしゃいのに尊重されているのは、なぜなのか?

スマートなしゃべりと学歴は関係しない!と私は思うが、あんまり真さを見せたり切れ味が強いと男性ウケしない、という考えが邪魔するの。マスメディアが求めているのか、私にはわからない(いくらでも、スキルが磨かれる人は多い)。

何より、リーダー・貴族に、女性の魅力を感じさせる必要はないだろう。

さて話を戻すと、私の見てきた古い社会では、性別的に男性の方が話は長い。何度も同じ自慢話を繰り返すそうとて、わきまえる女性たちは「ああ、そうなんですか」とうなずきながら毎度初めて聞くような態度をするのがマナーだった気がする。

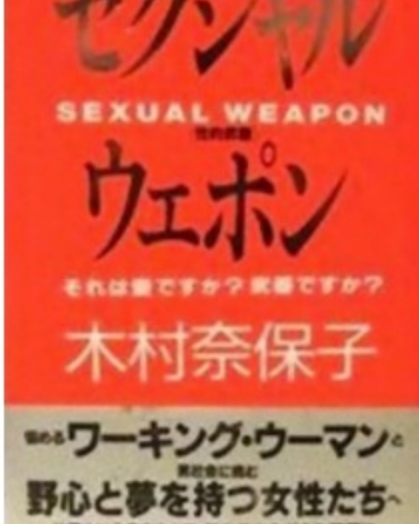
男女が混ざるシーンでは、必ず男性たちが仲間の紹介をしあい、彼がいかに仕事ができるかと、どんなに面白い人物かと、楽しそうにお互いを楽しめるい、にここを女性たちを前に、男よりアピールする。

飲み会となると、男性陣は女性のキャリアに興味はなく、男目線に入り、若い、好みの女性たちをチェックしているようすが伺える。

自分が若いとセクハラの対象になるが、それを過ぎると安心ではあるものの、代わり若い女性を差し出す側で、男女の危うさを見送すくらいの露骨が要求される。いわゆる、チヤマボポジションだ。そういうわきまえた女が社会で尊重される。

いちいち男性の行動に目くじらたてた女性たちは、彼らにとって不要なのだ。

だから、接待は断らないとわきまえた女性露骨の配慮に出世があり、オリンピック新会長が、いやがる浅田真央さんには権力者たちとハグをさせようとした、とされるチヤマボ要会者も想像に難くない。



私の経験では、セクハラ系の結核な男性をこごとく直球でやり返してきた歴史があり、その体験談を本にも書いてきたが(『セクシャル・ウェポン』講談社刊)、一方で、そんな社会を覆すかのような、当時としては理解ある大物たちとの色気のない関わりにより、大きく成長できた感謝も持ち合っている。

その友人たちは、良い就職に恵まれ、能力があっても、普通に家庭をも望んだため、夫の都合で早くも仕事を断念した女性が少なくない。そんな世代だ。

若いうちの苦労を取り返すタイミングを逸したのは、残念だ。

私は、キャリアを続けること優先ですが、人生を考えたことがない。

そこには、かけらの迷いもなかった。

男性と同じポジションをつかむには、何倍もの努力をしなければ、できるわけがない。男社会をこごとくつかんでやろうという気概があったのだ。

女の壁は厚かったが、裏方の仕事に目覚めたとき、女性らしく振る舞う必要がなく、自分らしくなれた。自分ではこれだ、「男になれる」と開放されたものだ。

おりしも、アメリカ映画では、ヒロインが男性の無意味な差別発言に対して、切り替えしていく。

「女がそういうことされて、喜ぶとも思っているの?」



映画「テルマ&レイズ」(1991年、米)のセリアを自著「女を読む映画」(近代文芸社)のテーマにしているのだが、女性二人の逃亡の旅で、連行くエロオヤジから下品に誘われたときの切り退した。その後、オヤジのトラックを潰壊する、痛快なシーンが忘れられない。

かくして映画のヒロインは、男性の側面に立ち向かう女性たちになり、理不尽なことがあると、直球で言葉にして表現した。

女性の復讐回は、ヒロイックな男性主人公を支える恋人役や殺される婚嫁役とは限らないのだ。

いや、映画の中だけではいい。現実社会と並行して、アメリカは、ジェンダー革命を起こしていった。

まさに、アメリカは多様化社会。

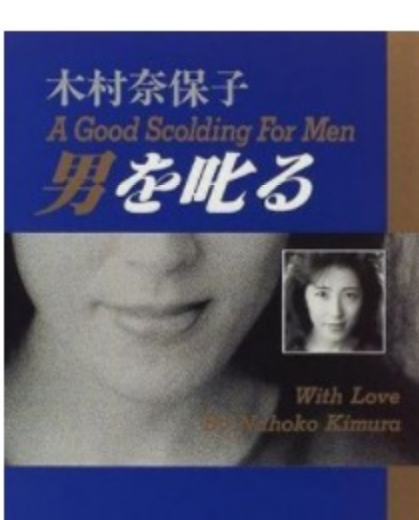
黒人、ユダヤ迫害の歴史はもちろん、女性差別があり、その後にヒスパニック、ゲイ、障害者、動物など、マイノリティの差別に立ち向かうため「映画監督」が誕生したのである。

かくして男性たちは、女性たちに対して無意味に発している無礼な言葉、考え方を徐々に修正していくことで、理解を深めていく。

男性にとって、もはや女性は恋の相手だけでなく、仕事仲間や友人関係もありうる。

男性にとって、恋の相手が女性とは限らない。

映画があらわな差別に対する意識改革をサポートしていったのは、事実であり、そうしたジャーナリストイックな視点で斬り込むメディアがいまだに少ないのは残念だ。



かつて、「男を叱る」という連載を週刊誌で始めたとき、周囲の女性たちが、どれほど私に電話してきたか?

それは、彼女たちが経験した社会における差別体験を聞いてほしいからだった。

主に対象は、上司や仕事をもらう相手だが、仲間同士の飲み会や人間関係のない関係でも、我慢を強いられるという話だ。

なんで、その場で言わないの? 後で言うとか、悪口になるだけでは?

私は、映画を参考に早くから切り返しをしていたから、「女性にはなぜ性的に嫌なことを言われたら、直球でその人に伝えないのか?」不思議だった。

しかし、それは自分が早くからそういう問題を乗り越えていたからであった。多くの女性は、あえて自分が嫌われたくない、我慢を受けたくない、角をたてたくない、といった理由で、その場をしのぐ方法がなかったのだとわかった。

こうした日本女性の「わきまえた」行為により、男性は悦に入って過ごしてきた代わりに、時を隔てた今、若い世代から急に叱られてどんなに笑ききとされるようになる。

だから、男性教育を社会並みに、と訴えてきたのに……!

フェミニズム論では著名な落合恵子氏や田嶋陽子氏、上野千鶴子氏らについて、私も随分ながらそれを説いてきたつもりだ。

昔は、フェミニズムというだけで、男性に嫌われることを恐れる女性も多かった。

特に田島氏は、テレビでその思想が知られるだけに、相当な嫌がらせを受けたことがあるとご本人からも聞いた。

女性は差別されている!と訴えて、暴行女性はどういう理ののか?

なぜ、対象とならない男性までもが、フェミを嫌うのか?

この種のリーダーたちは、本当に正しいながら、わきまえずに主張を続けてきた。

昨今、ふつてわいたような若い世代の女性差別への怒りは、日本中を激し、世界のメディアでも取り上げられた。

SNSを見ると、いまの世代は確案に、男女平等社会に向いている。

世界水準を目指しているに違いないと思うと、心から感慨深々、応援したくなる。

どんなにあがいても、差別や露骨の感覚は、一夜にして変わらない。

日本のなかのこうした男性の意識はあまりに遅れていて、竜宮城にいた浦島太郎みたいなのだから、時代錯誤になるのは当然だろう。

キャリアのある上司たちに筋道なく曲向かうのはいいだけじゃない。性的な部分でのよいね(ハラスメント)については、差別と感じる限り、言い返すべきだろう。

それまで女性たちが優わしいと思いつつ我慢してきた「しなくてもいい努力」のひとつだ。

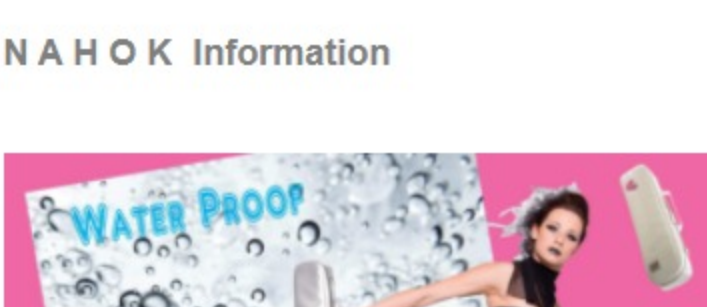
女性の魅力を引きりとさせながら、わきまえる先輩たちが男性社会をそよそよ立ち回る時代は終わった。

いまこそ、女性ができることは、ヒロイズムを失った男たちに成り代わり、筋道のある世界に戻すことだろう。



木村奈保子
作家、映画評論家、映画制作者、映画音楽コンサートプロデューサー
NAHOKI/ブックデザイナー、ヒーローインターナショナル株式会社代表取締役
www.kimuranahoko.com

NAHOK Information



木村奈保子さんがプロデュースする“NAHOK”は、欧州製特殊ファブリックによる「防水」「温度調整」「衝撃吸収」機能の業務ケースで、世界第一線の演劇家から愛好家まで広く愛用されています。

Made in Japan / Fabric from Germany

問合せ詳細は[NAHOK公式サイト](#)へ

PRODUCTS

2コンパート・リュック「Carlito/wf」

2コンパート・リュック「Carlito/wf」(フルート、オーボエ、クラリネット対応)は、Wケース+マチ幅4cmのコンパートメントを追加し、革(ハンドル)をつけないスタイル。

フルート、オーボエ、クラリネットに対応するブリーフケースで、リュック専用のケースバッグです。サイズはWケースとまったく同じで、カバン、小物類の別コンパートメントを追加

しまた。外装は、ポケットを含めて全面止水ファスナーで構成されています。



>>BACK NUMBER

第23回:「異色の血とブルー」

第24回:「メタボリズム」の意外なメッセージ

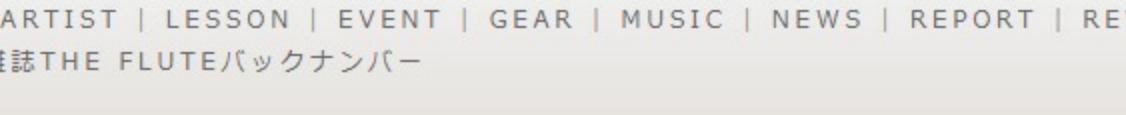
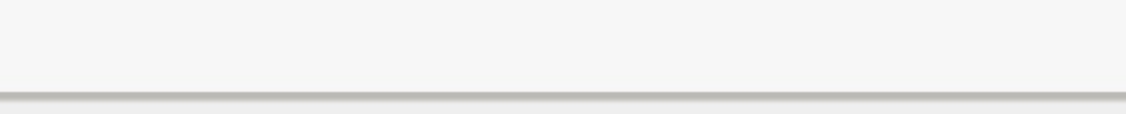
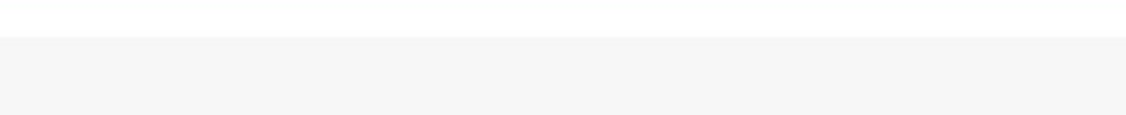
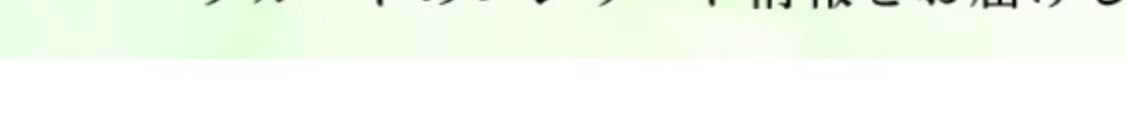
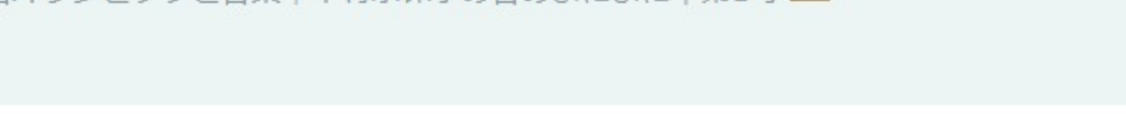
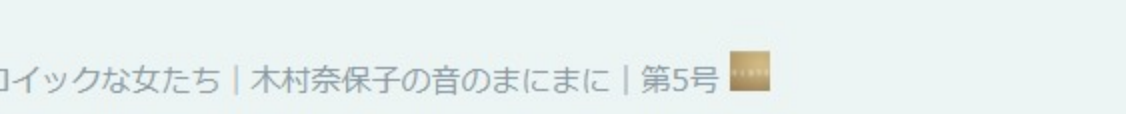
第25回:「まっとうなヒロイン像の『龍宮』

第26回:「ウィルスよりも怖いのは……」

第27回:「私たちが踏みつけるのは……」

第28回:「英語の映画化による、シネマセラピーの時代へ」

第29回:「『ノース・ポンス』の舞台は、いつ終わるのか?」



THE FLUTE お知らせ



THE FLUTE vol.189
THE FLUTE「バックナンバー」
FLUTE CLUB入会・更新はこちら
フルート楽譜一覧

ENTRY 投稿・応募
>>> THE FLUTE アンケート一覧へ

